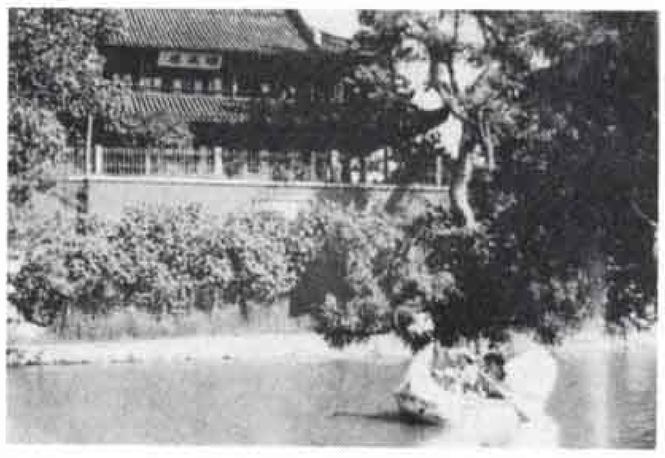
ニィハオ 你好 10

嘉興市（かこう）

▽南湖と烟雨楼



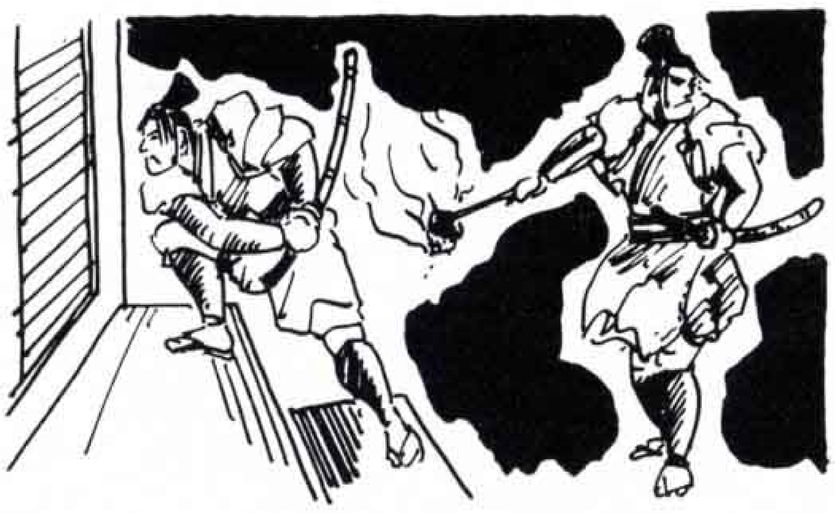
嘉興の名勝「南湖（なんこ）」

嘉興市の南端に南湖があります。南湖は二つの湖からなり、二つの湖が一対のオシドリのように寄り添っているところから、鴛鴦湖（おしどり）とも言われています。南湖で有名なのは烟雨楼（えんうろう）ですが、烟雨楼は最初、湖のほとりに五代呉越時代に建てられました。烟雨楼の名は、唐代の詩人杜牧（とぼく）の漢詩に由来していると伝えられています。その後、明の時代（16世紀）に、湖の真ん中にある小島に、古い時代のものをまねて現在の烟雨楼が建てられました。そして1921年7月、中国共産党第一次代表大会の最後の日程がここで開かれたという、歴史的な建築物です。現在は、当時使用したすずり石や詩などが展示され、博物館のようになっています。また、休日ともなると多くの親子連れでにぎわい、嘉興市民の絶好の行楽地となっています。

ふるさとの昔話

鷹岡の厚原に伝わる 曾我の首洗い井戸

鷹岡厚原の曾我八幡宮から凡夫川に沿って、三百メートルほど北へ行くと「曾我の首洗い井戸」があります。昔、曾我五郎の首を洗った場所だと伝えられています。



右から杉山市太郎さん
◁杉山光雄さん

兄弟のあだ討ち

それは今から八百年ほど前、源頼朝（みなもとのよりとも）が鎌倉に幕府を開いたころ、建久四年（一一九三年）五月二十八日の夜のことでした。ここは富士のすそ野、上井出（富士宮市）の里です。

「我らは伊東の城主祐親（すけちか）の孫、曽我の十郎並びに五郎なり。たった今、親のかたき工藤祐経（すけつね）を討ちとったり」

と、親のあだ討ちを果たした曽我兄弟の声に、巻狩（まきがり）の仮小屋に眠っていた武士たちは、我も我もと、刀を振り上げて切りかかってきました。兄弟は死力を尽くして戦いましたが、ついに力尽きて、兄の十郎は仁田四郎忠常に討たれ、弟の五郎は御所の五郎丸という武士に取り押さえられてしまいました。

ところが、将軍源頼朝は、その場で五郎を殺さないで、鎌倉へ送ることにしました。しばられた五郎が、大勢の武士に守られて鷹ヶ丘（今の鷹岡）まで来たときのことです。祐経の子、犬房丸が、

「ここで五郎を討たせてください」

と泣いて頼むので、護送してきた武士たちは、犬房丸に五郎を討たせてしまいました。そして五郎の首は、この池で洗って一たん鎌倉へ持って行き、さらに曽我の母のところへ届けられました。

鷹ヶ丘の人々は「この池が血の池になった」と伝えています。

そして五郎の亡きがらは、近くの福泉寺（今の曽我寺）へ葬られたということです。

池の水が赤くなる

案内してくれた杉山市太郎さんと杉山光雄さん（区長）は、

「私らが小さいころは、まだ水はあったね。関東大震災のときから水がなくなったような気がするな。伝説だと思うけど親からは、毎年五月二十八日には、池の水が赤くなったって聞いているよ」

と話してくれました。

地名の由来

中河原（なかがわら）（吉原地区）

中河原村は、今の公設卸売市場の西側付近にあった村で、明治二十二年荒田島村などと合併して島田村となった時点では無人の村でしたが、延宝八年（一六八〇年）までは三十戸ほどの人家がありました。しかし、この年の八月六日の大津波で流され、助かった農民は吉原宿やその付近へ移住してしまいました。

中河原というのは、潤井川と和田川との間の河原という意味でしょう。

こちら編集室

九月十九、二十日に編集室では秋の旅行に行ってきました。日ごろの行いがよいせいか、はたまた幹事の腕がよかったのか、両日とも快晴。楽しいときを過ごしました。秋の旅行にしては早すぎるのですが、十月、十一月の日曜日は取材日程がメジロ押しで、調整ができないのです。

さあ、十月も頑張るぞー。

発行・富士市役所　富士市永田町1丁目100番地　☎51－0123　人口 219,499人　男 108,951人　女 110,548人
編集・総務部広報広聴課　世帯数 62,962世帯　（9月1日現在）